

に「一冊の感想にすぎない」

なお、杜氏は「この本の発刊の時には、所屬の Department of German and Slavics Lang. にて、
「一冊」

"Selected Bibliography" の中に「日本語の語彙の整理」の作業に於ける杜氏の評語を次に

1. Translations

Urushiyama, Masamirō. Pioneer work in Japanese, not always accurate in translation.

Arai, Ken. Seventy-six poems translated with notes and an enlightening introduction.

Suzuk, Torao. Provides many original interpretations, but not always supportable.

Saito, Shō. Synthesis of previous scholarly opinions with a critical attitude.

2. Studies

Harada, Ken'ichi. Wholehearted devotion to study of Li Ho; broad historical investigation and useful
tongential materials.

Kusanori, Shinichi. Energetic and devoted biography, broadly includes information on the times and
other figures contemporary with Li Ho; hypothesizes boldly and investigates scrupulously.

また挙げられた英文資料の中には「*Li Ho and the Lankavatara Sutra*」

Sutherland, Joan. "Li Ho and the Lankavatara Sutra." *Journal of Asian Culture*, Vol. II, No. 1

Spring 1978, pp. 69-102. The Graduate Students in Asian Studies at UCLA.

『文芸論叢』6（上海文芸出版社一九七九年一月但し郵付には二月刊）に李賀に関わる論文が二つ。易朝志「談李賀詩歌」と王啓興「藝術托情 情趣盎然——淺談唐詩中比的運用」だ。易氏の文中、次のような言葉が見える。

文芸創作で大切なのは創造で、詩はことに独創が大切だ。雷同因襲は詩人には禁物。李賀の詩歌の創造性主要表現は芸術方法上にある。

同感だ。そうして、これをもう少し押しひろげて、文芸研究においても独創が大切であり雷同因襲は禁物だ、と書いていいのではないか。

そういってよいとして、李賀について書かれた論文を、可能な限り手に入れて、大いに期待しながら読んでいって、がっかりするのは、雷同因襲が少くないことだ。易氏は李商隱「李賀小伝」中の「未嘗得題然後為詩、如他人思量蘊合以及程限為意」を引き、千年前に李賀はこういうやりかたを心得ていて「思量蘊合」の八股調、公式化に反対して、これがまた他面、李賀詩の「新語麗」の原因を説明する、という。これにも同感だ。

易氏はつづいて、四人組は「路線よりの出発」「主題先行」のたぐいの濫調を鼓吹した。これは李賀とは対照的で、かれらが文芸を反党に利用し、すでにどんなところに墮落していたかを説明する、という。

そう聞くと、あのころの李賀（詩）の雷同は、そういう事情から生じたのかと納得がいく。だが、易氏がそのあとで、

当然、对李賀詩歌我們也应当堅持一分爲二。李賀詩歌所反映的社会現實生活面還是比較窄的。……李詩也有因多用比興而帶來的「意深詞蹊」的缺點，往往比較隱晦難懂。此外，也還存在因刻于操語，而詩的意境不够完整的毛病，前人批評他的詩歌「欠理」大約与此不无关系。至于他的詩歌雜揉着封建性的糟粕，意境过于哀傷淒冷等等，這都是歷史、階級以及個人生活条件等給他帶來的限制，不用說，我們必須以批判的態度來對待。

というのを讀むと、あなたの見えたかさんの意見にそっくりではありませんか。それでもあなたの場合は、雷同因襲ではない、というのですか、と聞きたくなる。

李賀は若いうちに死んだから社会生活体験は杜甫や白居易より少なかったのは確かだが、かれの詩歌はその時代と社会を反映したもので、その反映のしかたがたぶん易氏の考える反映のしかたよりも複雑だということなのだ。かれの詩がいわれるように「欠理」でないことは雑誌上に引いた林同濟氏の言葉が指摘する通りだ。意境が完整でないという評家はしばしば舊の詩を精読せず、に勝手な解釈を押しつけている。

雷同因襲は李賀の時代にもあり、易氏のいうように、今日もある。四人組だけがそうだったのではなく、わたしたち、中国にも日本にもインドにもその他のどこにもいる人たちすべてをふくめてわたしたちのなかに雷同因襲の衝動がある。雷同因襲の方が異を唱えて創造するより樂で世の風あたりも少ないからだ。

今日では李賀を讀む人の数が驚くほど多くなった。（わが日本では、中国文学の講座を開いている大学では、毎年、一人あるいは数人が、李賀を論題に選んでいるらしい。）きっとみな李賀が

好きな人たちのだろう。それなら、その人たちが、先人のすでにいったようなことを繰返して
いないで、未解決の問題を、さまざまの観点から、徹底的に検討してみたらどうだろう。先人の
論文の四つ五つから、よいところ取りをして気のきいた評論風の論文を仕立てることも、面白い
わけではないが、創造的とはいえない。易氏のことばを使えば、「思量壺合」の八股調とい
うことになるう。

わたしのなかにある雷同因習をまず撃破せねばならぬ。でなければ李賀に対してはすかしいで
はないか。

不必経境

1980.5.21

雅記 120

『永樂大典』卷八百二十一に元の李治（またけ治）の『敬齋古今註』の次の一条が載っている。
予、趙に寓し、府事を攝れる李君の坐に在り、坐客、詩を談ず。或るひと曰く、必ず此の境を
経て、則ち始めて能く此の語を道ふ、と。余曰く、然らず。此れ其の中なると下なるとより
之を言ふのみ。彼の其の能くする者は、則ち是れに異る。一も武（歩）を挙げざるに、六合
の外、至到せざるなく、一も眼を振さざるに、秋毫の末、照了せざるなし。是を以て之を才
と謂ふなり。才なるものは、三才の才の猶し。蓋し人の天地と並ぶ所以なり。必ず此の境を
経て、能く此の語を道はしめば、則ち其の才たるや隠し。子美、馬を詠じて則ち云ふ、向ふ
ところ空濶なく、真に死生を託するに堪ふ、と。子美未だ必ずしも曾て此の馬に跨らざるな
り。長吉、李憑の空篋を状して則ち云ふ、女媧石を鍊つて天を補ふ処、石破れ天驚いて秋雨

返ると長吉あに果して親しく其の処に達らんや。其の此の境を経ずして、能く此の語を道ふ。子美の子美たる所以、長吉の長吉たる所以、と。一坐、之が爲に嘿然たり。

似たようなことを若い頃のわたしも『李長吉』周辺でいったことがある。近代の文芸では常識だが、中国の傳統詩には詩は事實を歌うものという觀念があるため、敬斎の言葉が警句として一坐を圧倒したのだ。姚文燮が李賀の詩をすべて元和の政治や事件に結びつけて解釈しようとするのは敬斎とは反対の一般的觀念の方に傾きすぎているので、拙稿「秦王飲酒」でもいったように、そういうことがかれの発想の出発点に一つの条件としてあったにしても、かれの想像力はいつまでも出発点に停滯していない。「エマニエル夫人」という映画を見て、古くさいな、と思ったのは「必ず此の境を経て則ち始めて能く此の語を道ふ」式の觀念があの映画の主題となっているらしく感じたためだろう。

体験したからといって、その体験を語れるとはきまっておらず、語れても体験したときの感動が現されるとかぎりず、自分で表現できたと思つても、他人に感動を喚起できるとは限らない。あの有名な譚事件を、李賀は自分では直接には何一つ言っていない。

わたしたちは韓愈の「譚の弁」から推測して、賀のあれこれの詩にあらわれるくやしさを、そこに結びつけるが、どれだけ当てているかはわからない。

境と語の乖離を痛切にさるところから詩人はその語を紡ぎはじめているはずだ。

莊周は弾き弓でカササギをねらつて、我が身を忘れたおのれを射おとした。さすがは達人である。めくら丸がひょくくり当って鳥が落ちてても、うぬぼれしか捨てないわたしは、「山木篇」の

あの話を読んで、やゝと往周のえらさに氣づきはじめた。

李贄が二十七歳で死んだからかれの「世界」が小さいなどとは、とても言えぬ。きわめて表面的にいても、かれに教えられて、四十すぎでわたしはじめて『楞伽經』を読んだ。荳森紳一氏はスリランカに行って蝶ばかり追っかけていたそうだが、その話を聞いたとき、いかにも彼らしい『楞伽經』の読み方だなど思ったが、そんな感想は言わなかった。もちろん彼も『楞伽經』のことなんぞ思い出しもしない類付だった。

境と語とは、どこでつながり、どこできれるのか。

『楞伽經』の主題がこれだといって小綺麗にさし出せないのが『楞伽經』の主題だろうが、境と語のかかわりがその中の一つの問題であることは確かだ。

仏典は苦が手です、などと逃げを打たずに、若い人たちがここにも進出しているらしいことを知って乗しい。

『李贄論考』「あとがき」から

八世紀の末に生れ九世紀の初期に二十七歳で死んだ李贄は、「鬼才」とよばれたが、二十世紀の前半にはなお東アジアの二、三の國の好事の人に知られるだけだった。後半に入つてにわかに注目を浴び、その詩集は日本語と英語で全譯され、部分的にはドイツ語などの翻譯も出、紹介や研究は他の語圏にも及び、一九七九年のこんにちではすでに「世界の詩人」として、文學に關

心をもつほどの人々からその名を知らぬことを恥とするまでになった。

一九三五年前後に偶然かれを知ったわたしは、たちまちとりつかれ、作品を讀むために大學の専攻を支那學に運び、一九四一年、卒業論文に「李長吉」を書き、一九五三年、友の中新敬と創刊した同人雜誌『方向』にほとんど毎號かれについての文章を發表した。一九五四年から足かけ二十六年つとめた私立大學の雜誌『人文論叢』に寄稿したものの大部分もかれに関わる。

一九七一年一月二十九日、わたしは個人雜誌『李賀研究』を創刊した。趣旨は巻頭に掲げる次の記事（『李賀研究』について――省略）で明らかであるう。

二ヶ月に一冊の目標は、その年にけ果したが、だんだん怠り、一九七六年に第十四號を出したまま今日にいたった。

一九七八年の夏、感ずることがあり、教員生活をやめることにきめ、その準備をすすめ、一九七九年一月、ほぼ始末がついた。ぼつぼつ『李賀研究』第十五號にかかろうと思つていて二月十日、朋友書店主の土江澄男氏が來訪、わたしの李賀に関する文章を一冊にまとめて刊行したいとの意向を示された。

これまでも、他の知友や出版^社から同様の誘いを受けたことがあるが、みな辞退してきた。

夏目漱石は「則天去私」といったが、李賀は「則私去天」だろう、と考えたことがある。その當否はともかく、わたしの李賀への関りはまったく則私去天で、『方向』などに發表したのも公的な意味をもたぬひとり台點の焦續にすぎない。永年つきあつてはきたが、今もつてかれはわ

たしにとつては解りにくい存在で、いつのまにかうずだかなくなった文章は、「解らぬ」という基調をさまざまに變奏してきただけのようには感ぜられる。これが辭退のひとつの理由である。土江氏にもこの理由を述べたが、その私的なひとり合點の算帳を出さうではありませんか」と氏はあとへひかれぬ。

ところで、わたしの保存する『李賀研究』創刊號の表紙うらに、次のように墨書している。

一九七一年（辛亥）發憤することあり。一月十一日、個人雜誌『李賀研究』發刊を決意し、序文の草稿をつくる。創刊號發行の日は一月二十九日即ち幻城水子の命日と定む。十六日、序文を油印原紙に切る。……二十九日、表紙を刷り終り、本文の刷り了った三十二頁までをけさみ、佛前に供え、幻城水子祥月命日の回向す。……前日の二十八日、朋友書店土江澄男君、本誌の販賣を引きうけらる。これも因縁。君の友情に多謝す。三十日、製本にかけ、夤、この事を助く。三十一日より二月三日まで入學試験あるも、この業は歸宅後に必ず続け、……三日、九十二冊全部製本し了る。薄志弱行のわれ、ここに小志の第一歩を遂ぐるは、亡兒らの靈の來り助くると夤の悲母の情に由るといふべし。一九七一年二月三日夜十一時誠。

夤はいまの妻の名である。なお『方向』創刊のときには亡妻千美が製本、發送を助けた。さて、發憤しての第一歩はいいが、曲がりなりにも十四號まで続けえたのは、讀者諸賢のあたにかい支持によること言うまでもなく、土江氏夫妻ならびに朋友書店員の各位のこの片々たる雑

誌に對する激勵と同情のためものであったと言わざるを得ない。

私的な妄言冗語集を出すことによつて朋友書店の蒙るべき信用の減少と經濟の損失をおもつと躊躇すにはおそれ多い。だが、それも顧みなくてよいと慰められ、理解に満ちた勸奨にありがたく従ふことにした。

『李賀研究』發刊までに、かれに觸れているわたしの文章は、創刊號に掲げた次の表（省略）の通りで、本書に収めるものは番號に○を加えた。

これに『李賀研究』十四冊の文章を加えると、四百字原稿ではほぼ三千枚にあたり、どうてい一冊に収めかねる。本書では、創刊號から第四號までの大部分を採り、「和刻李長吉詩集附永田調兵衛」「華光」「永田調兵衛補遺」「吳鈞」「いずれも第四號所載」を割愛し、第十號から「李長吉覺書抄」第十一號から「『李神通』補遺」を採った。各號の目次は別に掲げるが、本書に収めえなかったものは、後に機會があれば別に一冊にまとめることになるだろう。

本文・附録ともにそれぞれほぼ執筆順に排列した。このたびの編集にあたってつける注を「編注」とよび、適當な場所に文字を小さくして組み込んだ。

もとの單純な誤記・誤植を正し、漢字はほぼ舊體に統一し、行間を節約したほかは、發表時のまゝにした。文章の冗漫・重複が目立ち、表記法についての無定見が反映して恥かしいが、わたしの著作のすべてがそうなのであつて、それを人の目にさらすとなれば、過去の無知醜陋も覆われぬほうがいと思つたからである。同じ理由で、引用詩文の訓讀や翻譯の拙劣と過誤も保存し、

特に間違いの甚しいものは編注で訂正した。この編集方針は高橋達明・土江澄男・中新敬の三氏の本書題名の選擇は高橋氏の助言に負う。

李賀に関するわたしの作業は、その初めから今日にいたるまで、数えきれぬ多くの方々の恩報によつて辛うじて持続しえたのであつて、名をいぢるに^{いぢ}擧げることには不可能である。幽明兩界の方々に、ここにあつく感謝する。

一九七九年四月十二日一五・四五

原田 憲 雄

右「あとがき」に記すような次第で『李賀論考』が思いがけなくも刊行されることになり、五月十一日、原稿をわたし、七月なかごろから初校刷りが出はじめ、九月にはいつて中絶し、ことし三月、のこりの初校を了えた。再校の出るのに時間がかりそうなので、おかげで氣にかかっていた『李賀研究』十五を編むことができた。

本 号 正 誤

- | | | | | | | | |
|-------|-----------|---------|------------|---------|-----------------|--------------|--------|
| 2・6 | 姚以↓姚苻 | 3・5 | 李賀詞↓李賀詩 | 5・15 | Seattle↓Seattle | 9・9 | 宋蜀本 |
| は「金樽」 | ↓宋蜀本は「今樽」 | 13・11 | 秦↓秦王 | 15・15 | 陳允吉↓陳允吉氏 | 18・7 | 有ら |
| す↓有らず | 21・6 | とこれ↓とこ | ろで | 26・13 | 『長阿含』 | ↓『長阿含』 | 中阿含↓『中 |
| 阿含』 | 30・16 | 七重によつて | ↓七重の行樹によつて | 31・4 | (修行經)↓(修行經) | 33・ | |
| 17 | 空虚であつて | ↓空虚であつて | 37・4 | 露はに↓露わに | 38・6 | 漢龍首科圖考↓漢龍首鑑斗 | |

圖考 39・12 證明された稱した↓證明されたと稱した 41 呼び返された月に照されて↓呼び返された月に照されて 42・4 謂ふ」という↓謂ふ」と王琦はいう 42・9 去るにみ↓去るに臨み 43・13 (舟前小鵝兒)で酒で↓(舟前小鵝兒)の酒で 45・3・4 美女である↓美女である 46・1・8 印刷の調子の悪くて不明のものがあるので全文を左に。

では「秦王飲酒」の主題は何か。

ひとことでは「秦王」すなわち中國の世俗王に對する諷刺だろう。ただ、陳氏のいう「世變無涯、人生有盡」への詠嘆を排除するものではない。「世變無涯、人生有盡」すなわち諸行無常をさうずくに世俗の權力に固執する「秦王」への諷刺なのだ。「秦王」の對蹠存在として堯舜ら中國の古聖王を掲げずに天竺の轉輪聖王を伏せておいたところが、李賀の新意であろう。諷刺は、言葉で人を刺す刃だ。この刃は、しかし、人を刺すとき、刃を執る主をも同時に刺す。より正確にいえば、自らの心臓を刺し貫いた人によつてしか行使を許さない刃、たとえ行使しても効果を發揮しない刃だ。

46・12 かれらのいつ↓かれらのいう 50・9 それ五百の↓それそれ五百の 50・末 このよな↓このような 51・15 轉轉聖王↓轉輪聖王 51・17 あつたろう↓あつたろう。戒日の↓戒日王の 77・6 古精効と↓苦精効と

あとがき、

吉田秀和氏の評論には共感すること、教えられることが多い。「レコードと私」(『一枚のレコード』所収)に次の文章がある。

レコードを少しずつ注意してきくようになってうち、商売柄、批評が気になるようになった。自分がひどく感心した演奏のレコードがけなされていたり、そうでなくとも、ごく月並のきまり文句で片づけられていたりすると、自分のことのようにがっかりし、時には腹も立つ。また、音楽会ではよほどのことでもなければきけない作品をとりあげたレコードについて、そういうことにまるで考慮を払っていない。たまたま試験の答案を採点するみたいに、うまくいまずいでわりきってゆく態度に対する反撥。……音楽家、演奏家たちも、また、前の人たちの方が靈感にみちていたとか、あとの時代になるほど技術が進むとかいうことはない。で、それぞれに在り方とそれぞれの時代との様式において、作品に対し垂直な関係にあるのである。つまり、どの人の演奏も、一方では歴史の中で扱えなければならぬと同時に、どの人の演奏も、それ自体の価値と考え方の方の体系として、その内部で評価されるに値するのだ。……カナダのピアノリスト、グレン・グールド。この人など、今ではやたらに有名になったけれども、かつては、たまたま奇矯児扱いされるか、もったいどい場合は黙殺されていた。彼のレコードで最も早く出たのの1つはベートーヴェンの作品一〇九、一〇一、一〇二の三曲のピアノ・ソナタを納めたものだったと覚えているが、……また彼のひいたバッハの「ゴルトベルク変奏曲」なども、発行されても、さした注意もいかめまに倉庫に眠っていた。そう

して、これは、今日では、ひとりゲイルドの入れたすべてのレコードの中でというだけではなく、戦後のあらゆるレコードを通じて記念碑的な意味をもつものと認められているのに、日本では今でもヘビィゴールドベルクはランドフスカに限るなど、言ってしまっている批評家もいる。

これを読んでみると、どの分野にも似た現象や問題があるのだな、と思う。そうして、失望することもないし、期待しすぎることもないな、と思う。

似たようなことをいうにしても人がつくづく共感するような言い方がある。吉田氏の文章がその一典型だ、と思う。

文章を書く以上はそうありたいと思うが、わたしの書くものには人に反撥を覚えさせる体のものが少くないようだ。

もっとも、ヘビィボラズからトゲを削りとったなら、ヘビィは喜ぶかもしれないが、ヘビィボラズではなくなってしまう。あのれの醜い姿を美しいといいくるめる気はない。トゲを払い落としたくなる時だってあるのだが、ヘビィボラズはやっぱりトゲだらけで、瘡めた土に立っているのだ。

一九八〇年五月二十八日